
犯罪倫理-Scarlet Umbrella-

真木 葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

犯罪倫理 - Scarlet Umbrella -

【Nコード】

N8056M

【作者名】

真木 葵

【あらすじ】

パンドラのタイムリミットが迫る。怪盗の正体と目的を知らされて間もない新一だったが、ある日、快斗から「犯行現場に現れる赤い傘」の相談をされた。上空から見下ろしていると何らかのメッセージを発している風にしか思えないのだが、犯行時に確認する事は不可能だった。此処最近、怪盗の元へ現れる謎の傘：依頼を引き受けた探偵が見守る、怪盗のエキシビジョン・ゲーム。

前編 「工藤様、怪盗キッドとお知り合いなのですか？」

豊富な知識や綿密な計算、常識を逸脱した彼のIQの高さは“月下の奇術師”がそれとして世間を騒がす為に必要不可欠であった。わざわざ犯罪を予告し、警察に万全なる警備体制を敷かせる。それで居て華麗な手口で狙った獲物を掻っ攫う“平成のアルセーヌルパン”とは良く言ったものだった。

今月に入り犯行は三回目。被害総額は三件のみで五億は下らないとマスコミは騒ぎ立てる。しかしながら全国、いや、全世界にファンが居る珍しい“犯罪者”は誰の手にも捕まらない謎の怪盗として今世紀姿を現した。

彼にファンが多い理由の一つは、手口がマジシャンの様に奇抜でアーティスティックすら感じさせる物であり、漢字三文字で窃盗犯というよりは正に当人が名乗るとおり“怪盗”と言う、まるでコミックヒーローの様であるが故に、幅広い世代に（何故か）愛されるキッドであった。

そしてもう一つ。八年間の沈黙を経て復活した怪盗は、何千万・時には国の宝とも言われる何十億と言う宝石を盗んだ後、持ち主や警察に必ず返却していると言う事だった。これには流石の警察もお手上げだ。キッドが何を考えて居るのか、そんなものどんな高名な犯罪心理学者でも答えは導き出せない。

予告をし犯罪を楽しむ愉快犯なのか、それにしては負うリスクが半端無い事は説明するまでもない。とすれば、彼には何か“目的”があつて月下に現るのか…

我々の目を欺き、優美に犯罪を行う怪盗。白き魔術師を包む謎のベールは、未だ厚く覆われている。

「くっだらねえ…。何が“未だ厚く覆われている”だよ、美化しす

ぎだっつーの」

週刊誌の記事を腹の底から下らないと笑い飛ばしたい衝動に駆られたのは、怪盗キッドの正体を知って間も無い高校生探偵だった。見るようにと渡されていた雑誌を床に放り投げ、制服姿のままベッドに身を横にした。

今彼が居るのはその怪盗の住む一軒家、しかも本人の部屋だった。机にパソコン、クローゼットにTV、等身大の“父のパネル”が飾られていて極普通の高校生の部屋そのもの。

「オメー聞こえてんぞ」

両手にマグカップを持った少年が部屋のドアノブを肘で器用に開けて入ってきた。温かそうな湯気とカフェインの香りがする。こめかみを引き攣らせて仏頂面のまま、ベッドに寝転がる高校生探偵・工藤新一に「ほらよ」とコーヒーを手渡した。

「この記事が一体何だっつーんだよ」

「記事じゃねー、写真だ」

「…はあ？」

世間を騒がす大怪盗・黒羽快斗の事を大袈裟に書いている週刊誌。新一は面倒臭そうにもう一度雑誌を拾うと、コーヒーを啜りながらページを開いた。御丁寧にも見開きカラー、何処かの芸能人のスキヤンダル以上の騒ぎようだ。

「気付かねー？」

机に座り、ミルクとシュガーたっぷりのカフェオレにして身体を温めている快斗はぶつきらばうに質問を投げ掛ける。そのページに載せられて居る写真はいつもと代わり映えのしない、キッドキッドと観衆がまるでシユプレヒコールにも似た叫びを上げている野次馬ばかりの写真だった。

そして怪盗の記事を先程読んでいたワケなのだが、彼の狙いはさっぱり解らない。けれどその写真だと言われて改めて覗いてみると、端っこの方に不可解な物が映り込んでいる事に気が付いた。

「赤い傘、か？」

地上に集まる怪盗ファンでごった返す広場の写真の端、ほんの少し影の黒が足された真紅の傘が映っている。しかしそれを持っている人間の様相までは解らない。写真の角度ではなく、恐らく背の低い子供か女性だろうと探偵は推測する。しかし…

「これ、この間の金曜にお前が杯戸美術館からビッグジュエルを盗んだ時の写真だろう？あの時、雨なんか降っていたか？」

「全く」

この写真を見るだけでも解る。誰一人として傘など差していない。しかも彼らは“怪盗キッド”を見に訪れているファンばかり、傘など差していたら翼を広げて逃走する怪盗など見られる筈もない。

「もう立て続けに五、六回目なんだよなあ」

「何が？」

「オレの予告日に現れる謎の傘」

机に置いてあるカレンダーを見ながら快斗がそう呟く。勿論、怪盗として活動している日などメモっちゃいないが、彼の頭の中にはいつ何時何処で何をどうやって盗んだか、全て記載されてあるのだ。「犯行中にわざわざ自分のファンを逐一確認しているお前に脱帽だよ」

「バール、組織の連中が居るかも知れねーだろうが。…それに、結構目立つんだよその赤い傘、上から見ててもな」

「その五、六回立て続けに見る前は？一度も見た事なかったのか？」
新一に問われて頬杖付きながら記憶の引き出しを開けてみるが、恐らく収穫はゼロ。ビッグジュエルを狙う組織に命を狙われているのだから、観衆の中に赤い傘など見つければ覚えていないに違いないのだ。

「ない、と思う」

「へえ…」

快斗と違い、それ程気に留めている素振りを見せない新一は、コーヒーを飲み干すとマグカップをテーブルに置いた。鞆を拾い、週

刊誌を快斗に返す。

「帰んのかよ」

「どうせ次の予告日に、俺に様子を見て来てくれって言いたいんだろっ？」

快斗の言いたい事など、一々聞かなくても解るとでも言いたげに言い放つ。てつきり断られるのかと思いきや、新一の顔を見る限りじゃそうでもないらしい。

「とりあえずはその傘を見始める前の数件の犯行を調べるから、お前の持つてるデータを俺のパソコンに送っておけ。それから…」

新一が言い終わる前に快斗は彼の目の前に何かを突きだした。グーで握っているその様子を見て首を傾げる新一は、自分の右手の手の平を彼の手の下に広げる。快斗がニヤッと笑い拳を開けると、一枚の小さな一センチ四方のマイクロカードが新一の手の平に落ちた。

「…用意がいいな、オメー」

「怪盗ですから」

褒める意味で言ったワケではないのだと頭を抱えなくなったが、とりあえずそのカードを受け取ると胸ポケットにしまった。最初から新一が断らずに話を引き受けるだろうと思われて居た事に、少しだけ腹立たしさを感じた。

「持つべき物は名探偵の友人って奴だな」

「調子にのんな。俺はお前の事情を聞いて仕方が無く目を瞑ってやってるだけなんだからな。オメーが潰そうとしている組織を壊滅させるまでは大人しくしているとは言ったが、犯罪に荷担するとは一言も言ってねーから」

「はいはい、そう言う事にしておくぜ」

「…ったく」

正義感の強い探偵は怪盗の事情を知った上で黙って居たが、それでもビッグジュエルを狙う組織と対抗する為に犯罪に手を染めると言う快斗の取った方法を認められずに居た。しかし、いくら組織を壊滅させる為とは言え、警察やマスコミに不老不死なんだと公に

する事が出来ない以上は、こうして隠密に事を進める他ないのだ。

解ってはいるけど、許せない。その葛藤が新一を蝕むのだが、自分も同じように対組織の運命に巻き込まれていたからこそ、快斗を放っておく事も出来なかった。何よりも不老不死だとか人知を越えた未知なる領域へと踏み込もうとしている連中もだった。

「ま、宜しく頼むぜ？名探偵」

キッドの時の低い声音でそう言うと、新一は苦笑しながら「わーってるよ」と頷いた。快斗はビッグジュエルを盗む事と組織の連中の目を引き寄せる事で手一杯。窃盗は犯罪だと解っていても、快斗の死を望んでいるのではない…。

こうして二人が出逢ったのも、運命の手引きがあつた可能性もあるのだから。

その日、高層ビル群には無数のサーチライトと警察のヘリコプターが飛び交った。平日だと言うのに一体何処から集まったのか、怪盗を一目見ようと観衆が押し寄せる。対テロ並の警備体制が敷かれ、新宿は通常の倍を上回る人間でこった返した。謎のボールで包まれた怪盗のエンターテイメントが行われようとしていたのだから。

『工藤、聞こえるか？』

耳に入れていたイヤホンから快斗の声が聞こえてきた。雑踏に巻き込まれない様、近くのビルを繋ぐ連絡橋から様子を伺っていた。新一は襟元のボタン型マイクに向かって短く返事をする。既に怪盗は準備を終え、予告時間を待っている状況らしい。

「解っていると思うが、あんまり派手な事するなよ。ただでさえキッドキッドって煩せえーんだから。さつさと盗んで終わらせろ」

『まあ善処する。今の所は見当たらないが、そっちはどうだ？』

「…オメーの事だから又いつも通り警官に化けてもうビルん中入りちまってんだろっ？」

『あ、バレた？』

「こつち（地上）は規制が敷かれているし、近くに行った所で見つけられるか解ったもんじゃない。そっちが見つけて指示を出せ。そうしたら動く」

『了解。ま、何かあったら連絡してくれ』

あまり緊張感のない快斗の声は、それだけ言うスイッチが切れた。新一からも声を飛ばせる様にはなっているのだが、あんまり怪盗の時に話しかけるのは彼の首を絞めかねないと思い、こちらからは連絡を避けていた。

それでもなくてもお互いに携帯番号も知っているのでわざわざトランシーバー代わりにこれを持たされる必要もなかったのだが、これから一仕事をするキッドにとっては都合が良いのであろう。

（それにしても、あいつも阿笠博士みてーだな…）

小学生の姿だった頃、コナンの為に犯人追跡用に様々なアイテムを開発してくれた隣家の発明家。快斗が愛用するトランプ銃と言いつ、この超小型トランシーバーと言いつ、新一の支えになってくれた阿笠博士が作ってくれた発明品に良く酷似している。

それに加えて、彼にはマジックの才能がある。あんまり認めたくは無かったが、彼の大胆不敵なトリックには、新一も良く悩まされていたものだった。

（あと十秒）

腕時計を確認せずとも、街中が期待と興奮で溢れかえる。怪盗の名を叫ぶシュプレヒコールが、新一の居る連絡橋まで響き渡る。満月を背に、白き翼を広げて現れる奇術師を迎えるべく、盛大なる力ウントダウンが始まった。

「キッドだッ！」

「来たッ！」

喧騒とざわめきで星が消えた都会の夜空に、幾度と無く現れる怪盗。愚かな行為を繰り返す愉快犯だと思つて居たのだが、蓋を開け

てみれば自分と同じ様な境遇の少年がニコリと笑みを浮かべて真実を背負っていた。

ダミーとトリック、神出鬼没で沈着冷静、色んな要素を兼ね備えたたった一人の少年が、この日本警察を相手に行う一種のエンターテイメント。祭りの様な一大イベントが盛大に始まった。

すると、大観衆の前の現れた怪盗^{タミ}を見上げる人の波の端に、ひよっこりと赤い傘が見え隠れした。まさかと思い新一は胸ポケットにしまっていた黒縁の伊達眼鏡を掛けて右レンズのスイッチを入れた。赤外線望遠鏡機能が付いていてコナン時代に良く愛用していたのだが、こうして咄嗟の時には未だに良く使用している。

とうに日も暮れていたし、見つけたのは奇跡の様な確率でもあった。写真は一枚きりだったし、快斗の目撃情報も現場が違えば当てにはならない。赤い傘の人物がどの辺に出現するか、ましてや必ず来るかも解らなかった。しかし、現にこうして新一の視界の中に現れた。

連絡橋から位置を把握すると、キッドキッドと空を見上げる野次馬の群れをかき分けて走り出した。今は丁度予告時間を迎え、こちらから彼に連絡を取るのは避けた方が良さそうだ。新一はポケットから携帯を取り出すと、着信履歴から快斗の電話番号へと掛けワンコールで切った。トランシーバーを持っているのに携帯にワン切りされれば、それが合図だと彼なら気付く。

塞がったエレベーターを横目に、階段を駆け下りる。見逃したら快斗に何て笑われるか。ビルの階段を抜け、出口へと走り、人とぶつからないよう駆け抜ける。今この時も見物人が増えていく中、街路樹に半身を隠して傘を差す例の人物の元へ急いだ。

新一の足音に気が付いたのか、赤い傘は静かに揺れる。街中が目を見開いて夜空に注目しているこの時に、新一と傘を差した少女の視線だけがゆっくり絡まった。白いコートに桃色のブーツ、少しウエーブの掛かった髪が肩口で流れている少女は、二月の冷たい空気にほんのり頬を染めていた。

自分の元へ走ってきた見知らぬ眼鏡の少年を見上げる彼女は、息を整えている新一を不思議そうに見つめている。ヨーロッパのアンティークドールの様に可愛らしい瞳。新一は少しだけ膝を折って、彼女に声を掛けた。

「白石朱理さん、ですね」

突然見知らぬ人に自分の名を呼ばれて言葉を失いかけるが、新一の優しい表情には何の悪意も感じられないのでほっとした。答える言葉が出ずに小さく二回頷いてみせると、怪盗が狙う宝石が展示されているセントラルビルの屋上から、眩い光の花が咲いた。

「僕は工藤新一、探偵です。良かったら少し、お話を聞かせて頂けないでしょうか？」

新一は黒縁眼鏡を外し、スーツの胸ポケットにしまって首を傾げて挨拶をした。今頃快斗は仕掛けを作動させて、中森警部と鬼ごっこしている頃だろう。今日はどんな犯行劇マジックショーの演目かは知らないが、新一はまるつきり興味なさそうな素振りで朱理から目を離さずに居た。

少女は恐る恐る傘を降ろし、傘布を畳む。探偵と名乗る少年、見た事はなかったけれど名前だけはニュースで耳にした事があった。けれど何故その探偵が自分に声を掛けてきたのか解らない。

「…私に、一体何か御用ですか？」

戸惑いながら問い掛ける。子供にしては礼儀正しく、年相応の子供よりも若干大人びて見えた。それもそうだろう。彼女は元華族の息女だった。

「貴女がここ最近、その目立つ赤い傘を差して怪盗キッドの現場に現れる様になった理由をお聞かせ願いたいのです。貴女の祖父、白石喜之氏が所有するビッグジュエルが盗まれた後、急に貴女はキッドの現場に訪れるようになりましたね？」

小さな淑女に対し、新一も失礼の無いように言葉を選んだ。まだ若干十二歳という子供であったが、彼女が心に傷を抱える“被害者”なのだと気が付いて居たから。怯えさせない様に努めて笑顔で問

い掛ける。敵ではないと、信じて貰う為。

「私の様子を探るよう叔父に頼まれた方ですか？」

「いいえ違います。貴女の傘に何かメッセージが込められて居るのではないかと察したアイツから、調査を依頼されただけです。貴女の御親族の方とは何も関係ありません、ご安心下さい」

まるで気障な怪盗を演じるようにそう微笑んで見せると、朱理は再び目を睜って驚いた。自分の親族が有名な高校生探偵を雇ったのかと勘違いしていたのだ。しかも…

「アイツって…？」

「夜空に翼を広げて、世間を騒がしている気障な怪盗の事ですよ」

ほら、今この時も。…そう付け加えてセントラルビルの方角を指さしてみせる。回線に乗っ取った怪盗がオーロラビジョンに堂々と映り込んでいた。

『今宵も皆さんお集まり下さり有り難う御座います。それでは無事に仕事も終わりましたので、この辺で失礼致します。…また月下の淡い光の下でお会いしましょう』

まるで海外の映画俳優でも現れたかの様な歓声と悲鳴が入り交じった騒ぎが起きる。けれど新一と話をしている少女だけが、特別な魔法を掛けられた。

「工藤様、怪盗キッドとお知り合いなのですか？」

「…内緒にして頂けますか？」

人差し指を自分の唇に軽く触れさせて、ウィンクを送る。凄い真実を知らされてしまい、朱理はどう反応をすればいいのか戸惑いを隠せない。けれど、彼には何の悪意も感じられなかった。

そしてその話が本当ならば、怪盗キッドが自分の呼びかけに答えてくれた事になる。彼女は意を決して頷いた。

中編 「あのなあ、そんな事したらお前オレの“共犯者”になっちまうぞ」

月が中天に差し掛かる頃、漸く一仕事を終えて戻って来た快斗が合流する。新一からのメールに目を通しては居たがやはり件の少女の姿は既がない。新一は東都環状線の高架下、薄暗い駐輪場と二メートルはありそうなフェンスの間、人通りの全く無い狭い路地で快斗を待つて居た。

彼は未だ組織に命を狙われている者だ、快斗の事を信頼してないワケではないのだが万が一ハマして追っ手を連れて来てしまっても対処できる場所を選んだと言っ事だ。

「よう」

「遅せえーぞ、いつまで待たせるんだ」

合流できる予測時間ピッタリの筈だったが、彼を待つと言っ事が（犯行をしてくるのを待つと言っ事が）苦痛でしかない新一に取っては一言二言恨み言でも言わなければ気が済まない様子だった。その事を快斗も解っているから苦笑して話を受け流す。

「取り敢えず何処か入るか？」

「なら面倒臭えからウチに来い。外で出来る様な話じゃないしな」

「…はいはい」

今まで動いていた快斗は兎も角として、新一はこの寒空の下待たせていたのだ。それ程寒さを感じさせない様子だったが新一の事だ、そういうのは見せないのだろう。追っ手がやってきてないか鋭い視線で辺りに神経を張り巡らせるが、キッドを狙った奴等の存在は全く感じさせなかった。

「あのなー、もう少しオレを信用しろっての」

新一の余計な心配に呆れて見せるが、それでも彼は自分で確かめなければ気が済まなかった。一度、その手の組織と遣り合った事があるのだから神経質になっても仕方がないのだが。怪盗の命を狙う連中も、かなりの物騒な奴等だったから。

「信用して欲しかったら真面目にやる事だな。タイムリミットが近いからって仕事に手を抜いていると、二次災害つてのが起こるんだよ」

「んだよそれ、オレがいつ手を抜いたって…」

謂われのない事を言われて流石にムキになつて言い返すが、新一はそんな快斗を放つて一人さつさと歩き出した。今に始まった事ではないけれど、どうも犯行の日は快斗に激しく冷たく当たる。

何だつて言うんだよ、と文句を続けたかったが件の少女の話がもしかしたらそれに該当するのだろうかと思つたと疑念に思つと強くは言えない。仕方が無く快斗は無言で新一の後を追つた。

新一に正体を知られる前から何度か足を運んだ事がある米花町の工藤邸。相変わらず大きな洋館、電気が付いていないだけで正直不気味さがあつた。「お邪魔しまーす」といつもの様に玄関を上げる。普段ならリビングか、もしくは蔵書の要塞である新一の巢に招かれるのだが今日は違った様子。

怒っているのか疲れているのか、全く感情が読めずに素っ気ない新一になかなか声を掛ける事が出来ずにただただ後ろを着いて歩いていた。ひんやりした空気は無人の証拠。快斗も現在は実家に一人暮らしも同然だったが、まるでお屋敷の様な工藤邸は一人で住むには少々広すぎる。

「とりあえず俺の読みはほぼ当たっていた」

新一は自室に快斗を招き入れると、机の上のパソコンの電源を入れた。

「やつぱり、あの女の子だったって事か？」

「そうだ。順を追つて説明するが…」

最初に快斗の自室で話を聞いた際、快斗から受け取つてあつたデータを事細かく調べていた新一は一つの事件に目を付けていた。そもそも怪盗のタイムリミットも聞いてあつたから解つていたのだが、最近の彼の犯行は少し雑だというか逐一データを取つていた頃に比

べると簡素な情報しか入っていなかった。

しかしその内の一つ、元華族である邸宅から盗まれた宝石の事件に目を付けた。

「宝石の持ち主である白石喜之氏が、事件後に亡くなって居る事はお前も知っていただろう？」

「あ、ああ…高齢で持病があり余命幾ばくもないとは知ってたが…」
「解っている。お前はビッグジュエルを盗んだ後、その一時間後には返しに行った。いつもなら警察を撒いて暫く時間を置いてから返却するが、月が顔を出すのを見計らい直ぐに喜之氏の元へ返した」

神出鬼没の気まぐれ怪盗が、こうして直ぐ宝石を返したと言う事はそこまで大きな話題にならなかったのだが、持ち主の事を考えてリスクを負ってでも直ぐに返却しに戻った事を新一も解っていた。加えて言うなら怪盗の目的も知っている新一は、快斗を咎めるつもりで言ったワケではない。

「…けど、流石のオメーも失敗したな」

「だから、何だっつーんだよ。教えてくれって」

机の前で腕組みしている新一がマウスを操作し、あるページをデスクトップに広げた。快斗は肝心な事を教えて貰えずに歯痒い気持ちで新一の肩越しにモニターを見つめた。そこには新一が掻き集めた情報がびっしりと表記されている。

「あのビッグジュエルの本当の所有者は白石喜之氏じゃないんだよ」

「はあっ!？」

見るとそこには、高齡の喜之氏が孫娘の為に特別に誂えたペンダントを贈ったと言う記事が転載されていた。しかも御丁寧に写真まである。怪盗が盗みに入った際にはペンダントトップであるビッグジュエルのみだけだったが、それは小さな女の子の可愛い首から重そうに提げられているチェーンの飾りだった。

先程新宿で新一が声を掛けていたあの少女、白石氏の孫娘にあたる白石朱理。彼女が本当の所有者だったのだ。

「病死した喜之氏の息子、白石啓介…彼女の叔父がなかなかの強突

張りだったみたいだな。ビッグジュエルはただでさえ金銭的価値が高いのに、キッドが一度は盗んだ宝石だと知り、拍車を掛ける様に買い手が付いた。日本だけに留まらず、海外からも怪盗ファンの“物好き”な金持ちが、売ってくれ売ってくれと金を積みに来たらしいぜ」

一々快斗を挑発するように嫌味な言葉を使うが、事情を察した当の本人は伏し目がちに自分の失態を反省している様子だ。

「お前が返したビッグジュエルは喜之氏の手から彼女に渡る前に白石啓介に奪われてしまった。高齡の身体で激しく抵抗しただろうな。しかし息絶えた彼の手からまんまとビッグジュエルを手中に収めた彼は、あの宝石を売却しようとしているらしい」

彼女が返してくれと強く懇願するものの、十二歳の子供の戯言など聞いてくれる筈もなく、彼女は途方に暮れたと新一に説明していた。既に他界している両親、彼女に味方してくれる人は誰も居らず、それでも諦めきれない彼女は…

「お前にもう一度盗んで欲しいんだよ。永遠に、返さないでくれと」

「それが、あの子の望みなのか？」

「例えお前が奪い返して彼女の手に戻しても、あの叔父が再び奪い取って売却しようとするだろうから、だったらあの宝石は祖父と共に亡くなったのだと思った方がマシだよ」

「財産法だとか遺産譲渡とかで、何とかならねーのかよ」

「身内と争うような真似を好まないだろうな。彼女は自分が十二歳の子供であり、これからは叔父に育てられる身だと言う事も良く理解しているんだ。利発そうな子だとは解っていたが、悲しい位に自分の立場を認識しているよ」

けれど…

それでも愛する祖父から譲り受けたあの宝石を金に換えるのは嫌なのだろう。世間を騒がす怪盗に、まるで冒険心にも似た好意を寄せる彼女としては、いつその事キッドに盗まれたままで居て欲しい

のかもしれない。

「さあどうする怪盗キッド。この依頼を引き受けるか？」

彗星の期日が迫るこの時期に、ただでさえ通常の犯行で忙しい身だという事は新一も知っている。けれど最初にこの“赤い傘”からメッセージらしき意思を感じ取っていたのは当の本人。調査を終えた探偵は、怪盗に判決を委ねる。

最も、ここで彼が首を縦に振らなければこうして共に居る事もなかっただろう。

「どれぐらい交渉が進んでいるのか調べてくれ。オレは今から下見に行ってくる」

「解った。ドジは踏むなよ」

快斗は短く返事をする、新一の部屋から出て行った。一仕事終えた後だというのに彼の顔には一切の疲労を感じさせなかった。再び彼女の屋敷へ侵入する為に、怪盗と探偵は動き出す。全ては赤い傘の少女の為に、怪盗キッドのエキシビション・ゲームが始まった。

嘗て、亡き父の跡を追い“怪盗”になった彼は、元々備わっていた奇才なるマジックを巧みに操り、父の扮した怪盗に引けを取らない実力ぶりを発揮していた。決して二代目だと感じさせない怪盗を演じ、犯行を繰り返し、組織の情報に目を光らせながらビッグジュエルを探していた。

彼のイタズラのような犯行に釘を打ったのは、快斗の幼馴染みである一人の少女が言った言葉だった。快斗の正体を知らない少女は怪盗に対し「許せない」と発言した。盗みを楽しむ愉快犯としか思えない、父や警察を陥れて犯行を繰り返すただの悪党だと言って涙を浮かべた事がある。

事情を話すわけにはいかなかったが彼女のその言葉を聞いて以来、彼は真相を解明する目的を再確認したことがある。自分のやってい

る事を綺麗事で済ますつもりは毛頭ないが、それでも快斗は分別を忘れずに居た。

「どうするつもりなんだ？お前は」

一通り取引の情報を掴み快斗のアドレスへデータを送信し終わると、新一は椅子から立ち上がりバルコニーに光を溢す月へと問い掛ける。小さな依頼人はああ言っていたが、破格の金額になるであろうビッグジュエルを本当に盗んでしまうのか。

それは怪盗のポリシーに反する事ではないのかと小さな不安が脳裏を過ぎるが、新一はあくまで快斗と朱理から依頼を受けただけの探偵に過ぎない。

もともと犯罪はどんな形でアレ許せないモノ、極力関わり合いになりたくなかった。快斗の宿命も痛い程解っているからこそ、何もしてやれない自分が齒痒くて仕方がない。

今はただ、快斗がどう決断するかを見守るだけ。

新一は、徐々にこの惑星へ近付いてくると言う運命の巨星がもう少しだけ遠回りしてくれる事だけを一心に祈った。

“水瓶のザダルスウドから溢れしアルレシャが光り輝く時

再び朱き貴石を頂きに参上

する 怪盗キッド”

異例とも呼べる怪盗の奇行に警察を始めマスコミは大騒ぎをした。一度盗み、そして持ち主に返した筈のビッグジュエルを再び怪盗が狙うという事は今までただの一度たりと無かった事だった。しかし予告状が偽物である可能性は極めて低く、二度も怪盗が狙う宝石は世界中から注目を浴びた。

しかし一人だけ、この騒ぎに苛立ちを隠せなかったのは現在の持ち主である白石啓介氏だった。本当の持ち主が子供である以上、管理は彼の手に乗ねられているのは周知の事実。まさか売却予定だという事は世間に公表されていなかったが、それでもこの騒ぎになってしまえば何処から漏れるかわからない。

ましてやあの怪盗が二度も狙う意図がわからない。犯行後は持ち主に返すと言う習性がある怪盗だから案ずる事はないと思いつつも、今回の件は警察ですら頭を捻る異例の事だった。

「警部さん、これは一体どういう事なのでしょう。何故キッドは二度もこの宝石を狙うのですか？一度盗み、父の手に返した宝石をもう一度奪いにやってくるというのですか！？」

「落ち着いて下さい白石さん、私は二十歳の頃から奴を追っていますが流石に今回の事は我々も想定外でした。最近のキッドは“盗んだモノを返して”います。キッドは通常の窃盗犯とは違い、何か目的があり盗みを働いているのだと思って居ましたが、それが今回どういうワケかもう一度盗みに参上すると予告してきた。これは、何か事情があるに決まっています」

普段に加えて更なる厳重な警戒が必要です、そう言って警視庁は威信をかけて警備体制を敷く。怪盗キッドが何故盗むのか、その手掛かりが解る絶好の機会なのかもしれないのだから。

予告状から推察すると、彼は水瓶座が終わり魚座に成り代わる瞬間の事を暗号に秘めていた。今週末にキッドが現れると踏んだ中森警部は、事前に白石邸を訪れて啓介氏の許可を得て、セキュリティ方面を固めていった。

怪盗を迎え撃つべく、ダンスホールくらいの広さを持つ白石邸の吹き抜けフロアの中央に、朱い宝石は静かに鎮座していた。砲弾でもない限り撃ち破れない強固なガラスケースと警備員を二十四時間体勢で配置。白石邸の周辺は無数の警察車両が囲んでいる。

「んじゃま、ちよつくら行つてくるぜ」

高層ビルの屋上、定期的に明滅する航空障害灯を背に、白き怪盗はトランシーバーで新一に最後の連絡を取った。しかし新一の様子が少しだけおかしい、いつもなら憎まれ口なり喧嘩口なり飛んできそうなものだったが、電波の調子でも悪いのか新一からの声が届かない。

「どうかしたのか？」

「別に」

いつも通り機嫌が悪いだけなのだろうかと思い「そっか」と返して切ろうとする。けれど、新一は言い辛そうに息をのむ。

「俺が、目暮警部に頼んで現場に居合わせていればリスクは半減しただろうな」

「工藤……？」

「現場から情報を流してやれば、オメーだつて楽だろう」

二月の夜風に攫われそうな位に気弱な新一の声が快斗の心に届く。いつでも気高い正義の名探偵にしては、らしくない発言だった。怪盗の心情を知った探偵の意思は、正義と悪の間で揺れ動く。いや、正義と友の間だから、強固な筈の彼の意思は揺らぐのかも知れない。「あのなあ、そんな事したらお前オレの“共犯者”になっちまうぞ？それでいいのか？自分が何を言っているのか解っているのか？」「キッドを見逃している時点で同じだろう。それにお前にはこっちの組織を潰す手助けまでして貰った、コナンの姿だった俺の正体を知っていたお前が何よりの頼りだったんだ。俺が工藤新一に戻れたのもそうだ」

ハッキリと礼を述べた事は無かった。対組織の宿命が終わる時に怪盗である快斗と握手をした……それだけだった。しかし新一は彼に感謝していたのだ。だからこそ、怪盗を捕まえずに“友人”として付き合いもしていた。

そのウチに彼に対して協力したいという思いが芽生え始めるまで時間は掛からなかった。探偵である彼の正義感がそれを許さなかつ

たとしても、恩人である事は変わらないのだ。

「お断りだな」

『……………』

怪盗キッドはいつでも一人だった。彼を手助けしていた心配性の身内ですら、時折しか助けを求めずに居た。今この暗闇と都会の喧噪の間に居る怪盗は、たった一人運命に抗ってきた。

今更誰かの手を取ろう等と、思っちゃ居ない。

「確かにオレは“お前の事件”に首を突っ込んだが、それはただの興味本位だ。礼を言われる筋合いはない。それにお前は警察やFBIにコネがあるから便利な駒として利用させて貰っていたが、あくまでそれだけだ。オレに仲間は要らない、手助けも必要無い、工藤……お前は怪盗キッドとは無縁だと言う事を、良く覚えておけ」

彼がそう言い切っても、トランシーバーを持ったまま新一は頷けずに居た。快斗が自分の身を案じてそう言っている事も解っていた。自分の迷いは彼には迷惑でしかない事も。

そして、全て本音であるという事も。

『解った』

漸く喉を通った新一の返事が聞こえると、快斗の方から通話が途切れた。既に予告時間を迎えようとしている。けれど新一はトランシーバーを耳から離せずに居た。胸の中に遣り切れない思いが煮えたぎっている。

快斗も又、通話を切ったトランシーバーの発信口に視線を落とす。戸惑いながらも怪盗の身を案じている新一に、届かない言葉を呟いた。

お前は怪盗キッドとは無縁、けれど「黒羽快斗の友人、それだけだ」と。

後編 「依頼料払いやがれ、このコソ泥キッド」

一人きりである事は今更認識するまでもなかったが、不思議と孤独を感じる事は無かった。今日は怪盗の助っ人である寺井も快斗の友人でもある新一も居ない。クラスメートの魔女でさえ、目を光らせていても彼の元へ現れる事は無かった。

完全なる闇になる事は決してない摩天楼を、白い翼を広げて飛んでいる際、淡い光を地上に溢す月だけが彼の存在を知っていた。

いつもの手口と変わらずに警察無線を盗聴しているイヤホンのボリュウムをあげると、目的の屋敷の近くのビルに降り立った。今日の中森警部は随分大袈裟に捜査員をちりばめている様子だ。ダミーを使って捜査員を分散させた所で、屋敷の警備は変わらないだろう。しかし彼の最初の目的は屋敷に侵入する事だった。

「さあて、今日も頼むぜ」

快斗が袖口に忍ばせて置いたスイッチを押すと、屋敷の直ぐ側のビルの屋上に仕掛けて置いた黒いアドバルーンが突然花火の様な音を立てて爆発した。当然その事は直ぐ様無線で報告される。しかもそのアドバルーンの中には、怪盗キッドのダミー人形が仕込まれていたのだ。

「おっしや」

快斗は白い衣装のまま、そのビルから飛び降りた。翼を広げないまま彼の身は重力に従ってコンクリート目掛けて真つ逆さま。しかし腰に装着してあった頑丈なワイヤーのリールがもの凄い回転をしている。地面スレスレで装置ボタンを押すと、彼の身は地上二メートル程度の高さで止まった。

（工藤、お前は身体が小さくなって色々不便だっただろう。ハンデを抱えて遣り合うには少しばかり危ない連中だったからオレはお前の駒になった。けど、お前は探偵だ。オレの仕事に巻き込ませるワケにはいかねーんだ）

ワイヤーの先、フックの回収ボタンを押すと怪盗は音もなくコンクリートに降り立った。既に黒羽快斗としての感情ではなく、不適な笑みを讃えた盤上の孤独な怪盗となっていた。例えば現場に居合わせずとも、帰りを待つ者は居る。失敗は許されない。怪盗の仕事に目を光らせて、ヘマをすれば彼は嗤うだろう。

まるでクラスメートの一人の様に、鼻で嘲笑う。…そう、それでいい。

（オレとした事が、いつの間にか馴れ合いの日々にすっかり馴染んでしまっていた。悪かったな、名探偵）

騒ぎ立てる警察無線に耳を傾けながら、怪盗はとある空き家へと急いだ。壁には鳶が張り巡り、門には錠前が括り付けられてある。持ち前の運動神経で一足飛びすると、いつの間にか手に持っていた真鍮の鍵をドアに差し込んだ。予め事件前に拝借して置いたモノである。

放置されている割には中は小綺麗になっており、迷うことなく広間へ向かう。大きな二枚扉を開け放ち、そこにある古い暖炉の前へと向かった。

（泥棒には泥棒のやり方っていうモノがあるのさ）

随分長い間、使用されている形跡がない。暖炉に施されている立派な細工、何処かの紋章の様なレリーフに触れ、そつと力を込めると何かの仕掛けが作動したのか、ガゴゴゴと重量のある石像が動くような音が響き渡った。

すると、怪盗の目の前の暖炉の奥の壁がみるみるうちに下へと動き始める。身を屈めて懐中電灯で照らすと、そこには人が一人通れる程度の階段が現れた。

ふわっと怪盗のマントを揺らす風、外気とは違い少しだけ生暖かいその風を頬に感じ、怪盗はまるで子供がジャングルジムの上から飛び降りるような笑みで“白石邸へ通じる地下通路”を駆け下りていった。

(キッド…)

今晩は部屋から一步も出るな、そう彼女は言いつけられていた。念の為、部屋の外には警官が居る。勿論彼女の部屋の窓も開閉を禁じられていた。怪盗が再び白石邸のビッグジュエルを盗みにやってくると思った啓介氏によって、彼女は監禁状態だった。

当然それは幼い朱理を守る為であった。警察も同じ。本当は朱理が怪盗に「ビッグジュエルを再び盗み出して欲しい」と頼んだとは、この屋敷の誰も知らない事だった。

あの日、いつもと同じ様に怪盗キッドが予告した現場に現れた時、彼女に声を掛けてきた意外な人物に驚きを隠せなかった。工藤新一と言う名はニュースや新聞で聞いた事があったけれど、まさかあの“怪盗キッド”にあれだけ似ているとは、流石に偶然とは思えなかった。

『その宝石を返して』

最初にキッドがこの屋敷に現れた時、彼はいつもの手口でビッグジュエルを盗み出した。中森警部の警備体制も全て把握していた、敷地内に隠れて月の判断が下れば直ぐに返しに行く予定だった。下調べの段階で、白石喜之氏がもう高齢で病に倒れ、余命幾ばくもないと知っていたから。

一旦手にし、そしてパンドラではないと解れば直ぐに返すつもりであったのだ。けれど、そんな隠れんぼをしていた怪盗を見つけたのは、若干十二歳の少女だった。

『これはこれは、小さなお嬢さん。こんな時間に外へ出では御両親が心配されますよ』

彼女が怪盗を見つけた場所、それは高級車が止まっているガレージの中だった。怪盗はいつも翼を広げて逃げる、しかしそれは良くダミーだったとマスコミがたまに面白可笑しく報道する。翼を広げ

て飛んで現れ飛んで逃げると言う固定概念を利用し、警察の目を空へ向けさせて自分は歩いて帰るのではないか…ましてや自分の家には車が何台もある。

それを盗んで逃げるのではないかという少女の読みが、隠れて居る怪盗を見つけ出したと言うワケだった。

『それは御爺様がイタリアの宝石職人の方に特別に作らせたモノ、とても大事にしていらっしゃる宝石なの。お願いだから持つて行かないで』

逆光でその様子は見えなかったが、世間を騒がす怪盗と対峙している事に少女は激しい緊張を覚えた。しつかりしなくちゃ…そんな風に自分を奮い立たせてみても、目の前の怪盗に怯え声は上擦ってしまっていた。

『そうですか、確かに美しい細工が施されていますね、宝石が良く映えるデザイン、申し分ない』

怪盗はビッグジュエルを右手に持ち、ガレージの窓から差し込む月光に当てていた。淡い光に照らされて、赤い光がこの世のモノとは思えない怪しげな雰囲気醸し出している。

シルクハットとモノクルで隠されていたが、宝石を覗き込む怪盗はまだ少年の面影を残していた。それこそ、自分と大して年齢差の無い少年の様。ピーターパンが光のティンカーベルに問い掛ける様に、月に照らされた宝石を眺めている。

『驚かせてしまつてすみませんでした。目的の物じゃなければ直ぐお返しするつもりだったのですが、生憎、月が恥ずかしげに雲間へ隠れてしまつていたのが出来なかったのですよ』

わけの解らない事を言われ、まるでぐらかされているのかと勘違いした。けれど、何処か怪盗には恐怖を感じない。それどころか随分優しいな声音で朱理の足下に跪く。

『貴女にお返ししても良いのですが、そうなると貴女が御両親から“怪盗と接触したのか”と心配されるでしょうから、私が直々に喜之氏にお返しして参ります。どうか、この怪盗を信じてやってくだ

さい』

朱理の右手を取り、手の甲に触れるか触れないかの口付けをする。絵本の中のプリンセスの様な扱いを受けて、思わず頬が薄紅に染まった。月光に照らされた白銀の怪盗は、黒髪の優しげな少年。変装の可能性もあるだろうけれど、不思議と朱理はそれが素顔だと感じた。

『それでは良い夢を』

怪盗は気付かれない様に袖口からフィルムケース大の煙幕弾をそっと落とす。ポンツという可愛い音と同時に彼女の視界を奪い、その場から消失してみせる。突然マジックショーのステージ上でしか見られないような絡繰りに驚いていると、怪盗が居た場所に落ちていた一輪の赤い薔薇が目に入った。

花は枯れてしまったけれど、警察が追う窃盗犯にしては随分と優しげな瞳で自分を見つめていた怪盗だと今でも覚えていた。約束通り、その数十分後には喜之氏の手宝石が戻ったと知らされた時には、彼は何故盗みを働いているのかと言う疑問が胸一杯に浮かんできた。それが解れば警察も苦労しないだろう。けれど怪盗を憎んでいる警察とは違い、朱理は彼の事を突き止めたと言いたい一杯だった。盗んだ物を持ち主に返す怪盗だとは知っていたが、それでも後日とか一週間後とかTVで聞く。それなのに彼はあの日、態々リスクを負ってガレージに隠れて居た。

高齢の祖父の事を思い、用事が済めば直ぐに返して帰るつもりだったのではないかと。

「キッドだ!」

「来たぞ、奴だ!」

ふと、静寂の合間を縫う様に警察の怒号が響き渡る。部屋の外が一気に騒がしくなり、この屋敷に再びキッドが現れたのだと言う事

に気が付いた。外では一層、警察車両が増えていく。あの日に逢ったあの怪盗の少年が、また此処へ現れた。

不思議と彼女の胸がそつとトクンと一際大きな音を立てる。恐怖などではなく、この小さな胸が早鐘を打つ様に緊張しているのは、そんな負の感情ではないと彼女は自覚していた。

大好きな亡き祖父から贈られた大きなクマのぬいぐるみを抱きながら、開ける事を禁じられているドアの前まで急いだ。この包囲網を抜けて、彼は無事に逃げる事が出来るのか心配だったのだ。

彼の身を案じている自分が不思議だった、けれど、幼いながらも少女として怪盗に寄せる想いに頬を紅潮させている。どうか無事に逃げ延びて欲しい。そしてあの宝石を、悪魔の様な人達から守って欲しい。

金と欲に塗れた叔父には渡したくなかった。祖父から譲り受けた宝石、大切な想いの込められたペンダントを“金になる”としか思っ
て居ないあんな叔父には渡したくなかった。
けれどそれは朱理には無理な話だった。

だからせめて、ピーターパンの様な少年に盗んで欲しかったのだ
…。

「くんばんは、お嬢さん」

「…えっ…」

幻聴かと思い、とつさに振り向いた。電気を付けていると「まだ起きているのか」と叔父に怒られるから、朱理は部屋の灯りを消していた。窓の外からは警察の赤色警光灯が定期的に回転し、威嚇を帯びた赤い光が差し込んでいた。

部屋の外は騒がしかったけれど、部屋の扉は一度も開く気配がなかった。窓もそうだ。この部屋へと侵入できそうな所は一度も開いた形跡がない。しかし、確かに白い影がポウツと“大きな振り子時計”の前に現れたのだった。

「夜分遅くに女性の部屋へと侵入してしまい申し訳ありません、お許し頂けますか？」

「キッド……」

あの日と同じように、恭しく一礼する。マントが音もなくふわりと揺れる。朱理は夢か幻でも見ているような感覚に足を囚われる。クマのぬいぐるみを抱き、顔を半分覆い隠した。

「探偵から話は伺いました。この宝石の本当の持ち主は、喜之氏ではなく貴女だったのですね」

彼が宙に手の平を掲げると、何も無かった空間から赤い宝石が現れた。紛れもなく本物の光を讃えた、見事な細工のペンダントだ。朱理は、あれだけの警備員が守る広間からどうやって怪盗が宝石を盗んだのか不思議で仕方がなかった。彼はマジシャンだと世間は言うが、魔法使いなのではないかと疑ってしまう位だ。

「怪盗としてお恥ずかしい限りです。本当の持ち主を間違えるとは……。ましてやそれで、貴女に多大なご迷惑をお掛けしてしまった様だ。面目在りません」

ゆっくりと朱理の前に跪く、あの日と同じ様に澄んだ瞳で見つめられる。彼女も観念し、クマのぬいぐるみをそつと床に置いた。白いワンピースのパジャマ姿だったけれど、まるで怪盗とおそろいの白の様。

「その宝石は差し上げます。どうか、怪盗のお仕事にお役立て下さい」

「……本当にこの泥棒めにお譲り頂けるのですか？これは、貴女が御爺様から贈られたプレゼント。永遠に手放す事になってもよろしいのですか？」

彼女の目の前で、もう一度宝石が光り輝く。彼女の名“朱理”の朱色に優しく染まる。いつか大人になったら、そんな宝石の似合う女性になりたいと夢見ていた。けれど、それは叶わぬ夢……少女の想いは決して実ることはない。

「はい」

朱理はそつと手を伸ばした。小さな手の平をそつと。

戸惑いがちに、恥ずかしげに。

ゆっくりと怪盗のモノクルを外した。

「やっぱり、工藤様にとても似ていらっしゃるわ」

「内緒にして頂けますか？」

シートと、内緒話でもするように自分の唇に人差し指を押し当てて微笑んだ。最初に新一と出会った時と同じ反応、同じ台詞を返されて思わず吹き出してしまった。

「ありがとうキッド。私、もう一度貴方にお逢いしたかった」

「美しいお嬢さんにそう言っただけで頂ける何て、私は世界一幸せな怪盗ですよ」

「まあ、お上手ですわ」

モノクルを怪盗に返す。もう、彼には時間がない筈だった。いつまでも此処に居たら行けない、怪盗は警察やマスコミ、世界中が追い掛ける平成のアルセーヌルパンなのだ。

最後にもう一度、お互いに笑みをかわした。もう二度と逢う事は無い。彼はあの日と同じ様に煙幕と共に消え失せた。朱理にとってこんなに幸せな夜はもうやって来ない。

時刻を告げる振り子時計の音がやたら大きく聞こえた、相変わらず外は騒がしい。まさか、この部屋にたった今まで怪盗が寄り道していた等と誰が知るだろう。

「…ありがとう、キッド…」

朱理の小さな恋心を笑わずに受け止めてくれた怪盗は、彼女の大切な宝石を盗んだまま逃走した。二度と彼女の手に戻る事は無く、失われた宝石の謎は暫く噂となり、持ちきりになった。

午前中は冷たい雨が降っていた。コーヒーとサンドイッチ、新聞を読みながら軽めの朝食を取っていると、珍しくいつも正午近くま

で眠っている筈の友人が起きてきた。だから雨なんだろうな、何て心の底で笑って居ると、リビングに居た新一の元へ起きてきた快斗は、黒いスーツに黒いネクタイ、まるで喪服のような姿だった。

「もう行くのか」

「ああ」

昨夜、池袋のスカイタワーからビッグジュエルを盗み、そのまま帰還しようとした際に新一から連絡を受け、自分の家には帰らずに新一の家へとやってきた。ある物を借りる為に立ち寄っただけだったのだが、雨脚が強くなってきてしまったので泊まっていけばと新一が勧めたのだった。

「なら俺も行く、少し待て。コーヒーいれてあるから、それでも飲んでろ」

「けど、お前服は？」

「父さんの昔の奴があるから」

そう言って新一は新聞をソファへと置くと、廊下を出て二階へと上がっていった。警察を撒き、工藤邸に来たのはほぼ朝方だった。

お互いにまだ数時間しか寝ていないと言うのに、全く疲れている様子はなかった。

新一から借りた喪服はサイズがぴったりで、ただネクタイだけが少しばかり窮屈過ぎた。しかし喪に服するとはこういう事なのかもしれない。この程度の事で“窮屈”を感じてしまったら、彼女に申し訳ないような気がしてしまう。

リビングの高級ソファに身を投げ、新聞を手を取った。あまり大きなニュースとして取り上げられていたわけではなかったが、件の少女は少なからず有名になっていた。

怪盗キッドに二度も宝石を盗まれた元華族の白石家の孫娘、まだ十二歳という子供は、白石氏が亡くなった時と同じ病を患っていて、昨日神の御許へと旅立ったと訃報が報じられたのだった。仕事中の怪盗に連絡をいれる事はあまりしなかったのだが、それでも新一はメールを一本いれてやった。

あの日から、怪盗は“白石朱理”の手から奪い去ったビッグジュエルを肌身離さず持ち歩いてた。無くさないように、傷を付けないように、怪盗に淡い恋心を抱く少女の想いと共に、大切に胸の内にとめておいた。

盗んだ物は必ず持ち主に返しにくる、そんな珍しい怪盗だと言われて随分経つが、その快斗がはじめて信念を曲げた。盗む理由を知っている新一はともかく、世間の評価は例の一件でやはり怪盗キッドはただの窃盗目的で犯行を繰り返しているのだと定着しつつあるけど、それで良かったのだ。依頼人である彼女がそう望んだのであれば、世間からどう疎まれようが関係ない。怪盗として、彼女の意見を尊重したい。そして、今この宝石は快斗の物。

どうしようも、快斗の自由なのだ。

その後、海に見える丘の上に大きな十字架を大地に突き立てた墓…雲間から差し込む光が、天からの恵みの様な神秘的な風景の中に二人は居た。新一は勿論だったが、快斗もまた彼女に素顔を晒していたから、きっと朱理は驚いて居るかもしれない。

大きな花束を持ってやってきた、そっくりな二人。赤い傘のメッセーじを感じ取ってくれた二人の少年に、心からの感謝を伝えたい。無機質な十字架の石像だったが、二人は膝を付いて少女の冥福を祈った。まるでヨーロッパのアンティーク・ドールの様に可愛らしかった少女の事を、瞳を閉じれば彼女の笑顔が思い浮かべられる。

彼女が祖父と同じ病に侵されていると言う事に最初に気が付いたのは新一だった。赤い傘に込められたメッセーじは、怪盗に気が付いて貰う為ともう一つあったのだ。それは、現場には何台ものマス

コミのカメラが用意され、警察も又監視の目を光らせている。いつ何時、観衆の中に紛れた朱理の姿を叔父に見られるか解らなかったのだ。

だから、極力人混みの中へは入らずに端の方で“顔を隠す為”に傘を差し、キッドから貰った赤い薔薇を想定した傘を広げて怪盗が気が付いてくれるのを待つて居たのだ。事件の度に屋敷を抜け出し、月夜に想いを馳せていた。

今あの宝石は快斗の手元には無かった。彼女から盗んだ宝石は、二度と日の目を見る事はない。永遠に眠る本来の持ち主の胸元へと、還っていったのだった。

「これで、良かったのか」

「…さあな」

答えは誰にも解らない。ベストな判断だったのか、彼女に聞くことも出来ない。けれど厚い雲に覆われた空から、一筋の光が二人を照らしている。どことなく眩しい彼女の笑みの様に思えて仕方がない。

森の奥から聞こえてくる小鳥の囀りも、沖を泳ぐ波しぶきも、今の静寂の中で二人に何かを語りかけて居る様に思えて、ゆっくりと瞳を閉じた。

朱理が微笑んでいる、そんな気がする。

「んじゃま飯でも食って帰るか」

「ああ、オメーの奢りな。散々情報を掻き集めるのに人の事を利用しやがって、依頼料払いやがれこのコソ泥キッド」

「はあ！？オレは最初にちゃんと過去の犯行データを渡しただろうが！」

「あんな物、何の役にも立たなかったっつーの。大体オメー、最近

「ちょっと仕事が雑だぞ！」

「仕方がねーだろうが、こっちはタイムリミットがあつて……って前にちゃんと説明しただろうっ」

「知らねーな。怪盗の癖に探偵がついてなきゃ事件も片付けらんねーって、中森警部が聞いたら号泣するだろうぜ」

「んだとう！？工藤、テメーそもそもなあーっ」

一足先に運命の呪縛から解放された探偵は、文句を言いつつも一人月下に現れる怪盗の味方で居続けた。互いに好敵手と認め合った者同士だったが、日々喧嘩の絶える事の無い毎日を送る。

いつか怪盗が“黒羽快斗”に戻る時がきても、それは変わらない。むしろ、無事に宿命を終える事を願っている。決して口には出さないけれど、憎まれ口を叩きながらも側に居た。

タイムリミットまであと一月、忙しくなりそうだと苦笑しつつも、彼に協力する事は何ら苦痛でもない。早く怪盗と言う柵を捨てた快斗と、普通の高校生として再会する為。

二人の言い合いは何処までも続く。一人の少女にクスクスと笑われている事も知らずに。二人の背中が見えなくなると、ゆっくりと光は天へと還って行った。

後編 「依頼料払いやがれ、このコソ泥キッド」(後書き)

最後まで御付き合い頂きまして、誠にありがとうございました。

興味を持って頂けましたら一度本家のblogにお立ち寄りくださ
い♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8056m/>

犯罪倫理-Scarlet Umbrella-

2010年10月8日13時57分発行